

[注]

- (1)問2の回答は回想データであり、その時点で本当にそのように考えていたかどうか、厳密には分からない。しかしながら、各時点ごとの調査の実施可能性等も鑑みて、本章ではこの問2の回答が取得可能な最善のデータであり、それをもってその時点の生徒の意思と考えることとする。
- (2)調査票上は問3の選択肢はAからL(12 選択肢)までであるが、アフターコードの結果、「具体的な進学(希望)先は不明であるが、専門・各種学校、短大、四年制大学のいずれかを希望している」と思われるサンプルをカウントしたため、結果として13 選択肢存在することとなっている。
- (3)問2と問3は選択肢が異なるため、下記のような基準でカウントした。
 - ・問3での内定の有無や進学先決定の有無にかかわらず、直前の時点と同じ進路を希望していれば変更なし、そうでなければ変更ありとカウント。
 - ・問3が「家業手伝い」の場合、前の時点が「就職」なら変更なし、それ以外は変更あり。
 - ・問3が「まったく考えていない」の場合、前の時点が「考えてなかった」であれば変更なし、それ以外は変更あり。「迷っていた」も変更ありとしてカウント。
 - ・問3が「進学希望だが詳細不明」の場合、前の時点が「専門・各種学校」、「短大」、「大学」のいずれかであれば変更なし、それ以外は変更ありとしてカウント。
- (4)ここでの大学進学率は学校単位ではなく生徒が在籍する学科やコース別に算出した値を使用した。これは同じ高校であっても学科が異なる場合やコースが違う場合には、入学の目的も過程および結果としての進路選択の状況も異なるものになるだろうとの仮定による。
- (5)変数算出の際、「B. 私には人並みの能力がある」、「C. 全体として、自分に満足している」、「E. 決めたことは最後までやり遂げる自信がある」については「とてもあてはまる=4、ややあてはまる=3、あまりあてはまらない=2、あてはまらない=1」として、また「D. 自分には何のとりえもないと感じる」については上記とはスケールを反対にして足しあげた値を用いて平均値を算出した。なお、足しあげるだけでは無回答があった際に値が過小になることから、足しあげた値を回答数で除して算出した平均値を使用することとした。
- (6)詳しくは労働政策研究・研修機構(2004)『移行の危機にある若者の実像—無業・フリーターの若者へのインタビュー調査(中間報告)—』第1章を参照。
- (7)ただし、3.2.3でも指摘したように、内定獲得が自己評価の向上につながっているという解釈も考えられる。この違いを明確にするには就職活動以前の時点での調査が必要であろう。
- (8)文部科学省ホームページ内「総合学科について」より引用。
- (9)文部科学省ホームページ内「総合学科の設置状況について」に基づき分類。
- (10)出所：文部科学省ホームページ内「総合学科の設置状況について」
- (11)ただし、平均値の間には有意な差は観察されていない。

【参考文献】

労働政策研究・研修機構(2004)『移行の危機にある若者の実像—無業・フリーターの若者へのインタビュー調査(中間報告)—』労働政策研究報告書 No. 6

文部科学省「総合学科について」文部科学省ホームページ内

文部科学省「総合学科の設置状況について」文部科学省ホームページ内

専門・各種学校進学者の特徴と職業意識

——一貫型／模索型に注目して——

長尾由希子

(東京大学大学院教育学研究科)

専門・各種学校は、高卒者にとって高等教育機関かつ職業教育機関であるという多義的な性格をもつ。よって、専各進学者の特徴や職業意識について考察するには、その多層性と、在学時からの進路選択過程を踏まえる必要がある。

そこで本稿では、専各進学者を、進路志望が高1以来一貫しているか否かによって一貫型／模索型の二類型に分け、どのような要因が一貫型／模索型の差異をうむのか、また、類型の違いによって職業意識が異なるのかどうかを検討した。

その結果、学科・成績・勉強時間・進路活動などは一貫型／模索型の違いにほぼ影響しないこと、模索型は勤労観が乏しいままに専各を選択していることなどが明らかになった。つまり、フリーター輩出学歴の一つである専各進学者の中でも、模索型が相対的に不安定就労に流れる危険性の高い層だと考えられる。彼／彼女らが実際にたどる職業経歴との関係、進路選択過程に関するより詳細な分析は今後の課題となる。

1. はじめに

専門学校・各種学校進学者は年々増加し、現在では高卒者の進路の一つとして定着している。学校基本調査報告によれば平成16年度の高卒者のうち、専修学校（専門課程・一般課程計）へ進・入学した者⁽¹⁾は339,803人、実に27.5%に及ぶ。これは大学・短大等進学45.3%に次いで、就職16.9%を軽く凌ぐ数字である。専門・各種学校は、高卒後の進路として、非常にポピュラーな選択肢の一つになっている。しかし、大学進学や就職といった他の進路に比べると、専門・各種学校（以下、特に必要のない限り専各と略）についての調査研究は多くはない。

調査研究における専各の扱いは、中等後教育機関ないし高等教育機関⁽²⁾として扱うものと、職業教育機関として扱うものとに大別できる。そして、この二つの系統は分断されたままであったと言える。

冒頭で述べたように、専各は、高卒後の一大進路になっている。

しかし、高校生の進路研究においては、伝統的には大学進学か就職か、この数年ほどはフリーターなど非正社員の職に就くか否かといったことが、中心的な関心を集めてきた。そこでは、専各進学は結果の一つとして言及されるに過ぎなかった。高卒直後に学校からいずれかの機関・職場への「間断のない移行」ができるかどうかに関心が集中し、専各と

いう進路自体にスポットが当てられることは乏しかったのである。あるいは、とにもかくにも「手に職」系のルートであることから、どこか安堵感を抱きやすい進路であったためかもしれない。

そのために、同年高卒コーホートにおいて、専各進学者がフリーターよりも10%ほどは多いこと、また、フリーター層全体を出身学歴別に見た場合、専各出身層は高卒以下学歴に次ぐ輩出率であるという事実（小杉・堀 2002、pp.28-29）は軽視されてきた。専各が職業教育機関として設立されたことを踏まえれば、これは重大な問題のはずである。だが、これまでの進路研究においては、なぜこうした事態が起こるのかという原因、専各進学という層が孕む不安定さに注目してこなかったのである。

他方、職業教育機関としての専各の実態や機能に関する調査研究には、高専のそれほどのボリュームはないものの、すぐれたものが存在する。その多くは専修学校卒業生を対象とした、職業経歴などに関する実証的で総括的な調査研究である。

専門学校卒業生の入学動機、キャリア形成、職業観、離転職経験、仕事の満足感、学科と就職の関連、家庭観などについて総花的に調査したもの（雇用促進事業団雇用職業総合研究所 1983、1985）、専門学校卒業生の採用・配置や処遇について、他学歴と比較しつつ、企業に調査したもの（雇用促進事業団雇用職業総合研究所 1986）、これらと同類の調査を在職者と企業・事業所に行ったもの（東京都立労働研究所 1989）などがある。近年でも、やはり同様の事項につき調査し、より明瞭にまとめたもの（東京都労働経済局総務部企画室 1994）がある。いずれも都内の専門学校卒業生を対象としている。

これらの調査研究は、職業教育機関として専各が機能しているのかどうか、あるいは、学科編成と市場のニーズがマッチしているのかどうかといったことを検討したり、また、専各卒業生の能力や処遇を把握したりする上では、データとして非常に貴重なものである。だが、現実問題として、専各に進学する層が、スキルアップを図るなどの明確な職業意識に基づいた在職再訓練層よりも高卒直後という若年者がほとんどであるということ、また、入学時点で職業意識や勤労観が未発達な層が含み込まれていることに注意する必要がある。たとえば、東京都労働経済局総務部企画室による調査では、つきたい職業や職種について決めた時期が「専門学校入学前から決めていた」とする者は4割弱なのに対し、「専門学校在学中に決めた」とする者は約3割、「就職する時になってはじめて決めた」と「特に決めていなかった」とする者で約4割に達する（東京都労働経済局総務部企画室 前掲）。

なるほど、確かにこれまでも入学動機については調査がなされている。それだけではなぜ不十分なのか。

たとえば雇用促進事業団雇用職業総合研究所が1982年11～12月に実施した調査（雇用促進事業団雇用職業総合研究所 1983）においては、入学動機に関し「就職（または転職）の準備のため」、「免許・資格を得るため」、「技術を身につけるため」、「結婚の準備のため」、「趣味や教養を深めるため」、「人にすすめられたので」、「学校生活を楽しまたいので」な

どの質問項目を用意し、専攻別・男女別に見た動機の分布の特徴や、動機を「職業志向派」と「趣味志向派」に分けて見た場合の転職状況や現職への満足度などを簡単に見ている。東京都立労働研究所が1987年11月に実施した調査（東京都立労働研究所 前掲）でも、同様の質問項目で入学動機を選ばせている。「専門知識や技能を身につけるため」、「大学・短大では学べない学科があるため」、「実務知識を身につけたいため」、「免許や資格を取るため」、「趣味や教養を高めるため」、「より高い学歴が欲しかったから」、「学校生活を楽しむため」、「両親や先生などまわりに勧められて」、「進学したい学校に入学できなかったから」などの動機に関する項目があり、専攻による特徴についてごく簡単に言及されている。職業的志向や就業状況などと動機の関連は分析されていない。

これらの調査では、動機とその後のキャリア形成や展望についての関係は十分に明らかにされていない。前者の雇用促進事業団による調査でも、動機と転職状況や満足度について統計的な検定はなされず、結局、帯グラフで見ると限り「職業志向派」と「趣味志向派」の間に明確な差はないようだが（むしろ現職満足感については「趣味志向派」の入学動機の者で高い）、その原因は不明で、目的意識が不明瞭なままに入学した者は卒業以前に中退したのか、あるいは在学中に職業意識が高まったのだろうか、と結ばれているのみである。

そもそもこれらの調査の背後仮説には、専各への入学者と退学者が増加している状況で、「専修学校の在生学生には、職業への明確な目標を持って入学してきた学生と、どちらかというとなり無目的に、他に行くところがないからと入ってきた学生とがいると、一般に言われ、また、いくつかの専修学校へのヒアリングでも聞いた」（雇用促進事業団雇用職業総合研究所 1983、p.25）という一般論がある。要するに、より詳細に言えば、専各入学者には、大学などへの進学に失敗した「大学、短大断念型」、就職に失敗した「就職断念型」、文字通りの「無目的型」、「積極進学型」の4類型が考えられ（松下 1991、p.45）、動機もこれに対応していると想定されるのである。

こうした考えは、至極当然のことであり、おそらく正しい。だが、調査結果の現実的な含意を考えれば、単に動機について類型化するだけでは、適切な進路選択や進路指導にはつながらない。なぜ、どういう層が、そうした動機を抱くのかという点にまで立ち入って明らかにする必要があるのである。つまり、中等後（高等）教育機関かつ職業教育機関である専各は、高校生の進路選択とキャリア設計という観点から、専各入学以前、高校在学中の属性や行動、勤労観などとも関連づけて把握することが重要である。専各進学という進路を選びとるにいたるプロセスも視座に入れたような分析が必要なのである。しかし、従来の専各入学動機を類型化するととどまる調査研究には、そうしたより長いスパンでの進路選択への視点が欠けていたと言える（松下 前掲、pp.45-46）。

制度的にも現実的にも、多様な層を抱える専各。同じ専各進学という進路に決定した者でも、一貫して専各を志望していた者（一貫型）もいれば、様々な進路の修正や検討といった模索を経て専各進学に決定した者（模索型）もいる。そこで本稿では、進路選択過程

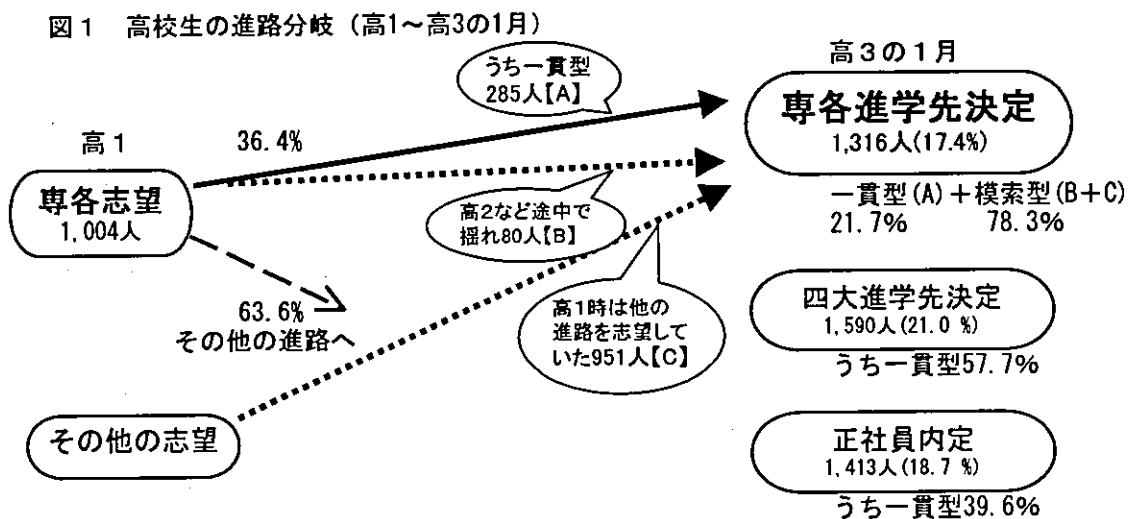
の詳細な類型に立ち入る前に、志望の一貫性というシンプルな基準に注目する。専各進学決定者を、選択過程について一貫型／模索型に分け、その選択過程の違いに影響を及ぼす要因と、選択過程の違いが職業生活への展望に影響を及ぼすのかどうかを検証する。

2. 専各という進路 —— 調査対象の特徴

本調査のサンプル 7,563 人における高校卒業後の進路は、四大・短大進学決定 28.0%、正社員内定 18.7%、専各進学決定 17.4%となっている（2004年1月時点の高3）。本調査では時期的な問題もあり、冒頭の学校基本調査報告の数字と比較して、四大・短大進学決定者が少なく⁽³⁾、また、専各進学者が少なく、就職者がやや多くなっているが、専各進学が就職と拮抗し、三本の指に入る進路となっている点では共通である（図1）。

本調査では、高1・高2・高3の4～5月ごろ・高3の7～8月ごろの4時点で進路志望の経過を、高3の1月時点で進路決定状況をたずねている。この4時点すべての段階で専各を志望し、かつ1月時点で専各進学先が決定している者を「一貫型」、それ以外の1月時点専各決定者を「模索型」として、以降の分析で使用する。なお、最終的な専各決定者は1,316人、実に219通りの進路選択過程が存在する。そのうち最多は一貫型で285人（21.7%）、次に高2まで大学進学志望で高3以降専各を志望した者が58人（4.4%）などである⁽⁴⁾。

他の進路と比較してみると、専各進学先決定者では一貫型は21.7%であるのに対し、四大進学先決定者における一貫型は57.7%、正社員内定者における一貫型は39.6%である。専各への進学は、四大や就職に比べ、模索を経ての決定となることが多いようである。



では、性別・学科・成績といった基本的属性別に見た場合はどうなるであろうか。1月時点での調査であることに留意しつつ⁽⁵⁾、見てみよう。

まず、性別について見てみると、四大進学先決定者では志望類型と性別の間には統計的

に有意な関係はない(表1)。正社員内定者では、一貫型に男子の方が多い(表2)(オッズ比1.6)。専各進学先決定者では、一貫型において女子の方が多い(表3)(オッズ比1.3)。

表1 志望類型×性別 (四大進学先決定者)

	男	女	計
一貫	513(55.9%)	405(44.1%)	918(100.0%)
模索	383(57.0%)	289(43.0%)	672(100.0%)
計	896(56.4%)	694(43.6%)	1590(100.0%)

$df=1, p=.659$

表2 志望類型×性別 (正社員内定者)

	男	女	計
一貫	367(65.7%)	192(34.3%)	559(100.0%)
模索	457(53.9%)	391(46.1%)	848(100.0%)
計	824(58.6%)	583(41.4%)	1407(100.0%)

$df=1, p=.000$

表3 志望類型×性別 (専各進学先決定者)

	男	女	計
一貫	102(35.9%)	182(64.1%)	284(100.0%)
模索	434(42.2%)	595(57.8%)	1029(100.0%)
計	536(40.8%)	777(59.2%)	1313(100.0%)

$df=1, p=.057$

次に、主な4つの学科について見てみると、四大進学先決定者では、一貫型には圧倒的に普通科が多い(表4)。正社員内定者では、模索型に普通科が多く、一貫型には工業科や総合学科が多い(表5)。専各進学先決定者では、志望類型と学科の間に有意な関係はない(表6)。

表4 志望類型×学科 (四大進学先決定者)

	普通科	商業系学科	工業計学科	総合学科	計
一貫	789(87.6%)	33(3.7%)	35(3.9%)	43(4.8%)	900(100.0%)
模索	498(74.9%)	55(8.3%)	66(9.9%)	46(6.9%)	665(100.0%)
計	1287(82.2%)	88(5.6%)	101(6.5%)	89(5.7%)	1565(100.0%)

$df=3, p=.000$

表5 志望類型×学科 (正社員内定者)

	普通科	商業系学科	工業計学科	総合学科	計
一貫	179(33.5%)	77(14.4%)	204(38.1%)	75(14.0%)	535(100.0%)
模索	365(45.1%)	125(15.5%)	224(27.7%)	95(11.7%)	809(100.0%)
計	544(40.6%)	202(15.0%)	428(31.8%)	170(12.6%)	1344(100.0%)

$df=3, p=.000$

表6 志望類型×学科 (専各進学先決定者)

	普通科	商業系学科	工業計学科	総合学科	計
一貫	186(66.1%)	44(15.7%)	30(10.7%)	21(7.5%)	281(100.0%)
模索	707(69.6%)	108(10.6%)	114(11.2%)	87(8.6%)	1016(100.0%)
計	893(68.9%)	152(11.7%)	144(11.1%)	108(8.3%)	1297(100.0%)

$df=3, p=.139$

成績を3段階にして見てみると、四大進学先決定者・正社員内定者・専各進学先決定者いずれにおいても、志望類型との間に有意な関係は見られなかった(それぞれ表7、表8、

表 9)。進路の選択過程（が一貫型か模索型であるかの違い）においては、決定が揺れるか揺れないかには、成績とは別の要因が関係すると考えられる。

表 7 志望類型×成績（四大進学先決定者）

	上	中	下	計
一貫	439(48.4%)	279(30.7%)	190(20.9%)	908(100.0%)
模索	286(43.4%)	217(33.0%)	155(23.6%)	658(100.0%)
計	725(46.3%)	496(31.7%)	345(22.0%)	1566(100.0%)

$df=2, p=.151$

表 8 志望類型×成績（正社員内定者）

	上	中	下	計
一貫	179(32.5%)	177(32.1%)	195(35.4%)	551(100.0%)
模索	246(29.5%)	260(31.2%)	327(39.3%)	833(100.0%)
計	425(30.7%)	437(31.6%)	522(37.7%)	1384(100.0%)

$df=2, p=.310$

表 9 志望類型×成績（専各進学先決定者）

	上	中	下	計
一貫	77(27.5%)	102(36.4%)	101(36.1%)	280(100.0%)
模索	273(26.8%)	342(33.5%)	405(39.7%)	1020(100.0%)
計	350(26.9%)	444(34.2%)	506(38.9%)	1300(100.0%)

$df=2, p=.514$

ここまでは、四大進学・就職・専各進学の3つの進路を比較しつつ、一貫型/模索型という志望類型の違いと基本的属性に関する単純クロスを見た。次は、勤労観など他の要因も入れ、それら他の要因をコントロールした上で、一貫型/模索型に影響を及ぼす要因は何なのかを探ることとする。

3. 専各志望の選択過程——一貫型/模索型を分かつ要因

一貫型か模索型か、志望の“揺れ”には様々な要因が影響すると考えられる。ここでは、一貫型/模索型を従属変数にしたロジスティック回帰分析を行い、志望類型に影響を与える要因を探る。

使用する変数は、模索型=1、一貫型=0を従属変数とし、性別・学科・成績・進路活動・高校へのコミット具合・勉強時間・勤労観⁽⁶⁾についての指標を独立変数とした(表10)。

性別は男女(男子=1としたダミー)、学科は人数の多い上位4学科である、「普通科」・「商業科・商業系学科」・「工業科・工業系学科」・「総合学科」に限定した(基準を「商業科・商業系学科」としたダミー)。成績は「上のほう」～「下のほう」の5段階尺度である。

進路活動指標としては、3変数を使用した。まず「先生への相談ダミー」とは、「進路一般について進路指導の先生や担任の先生に相談した」という項目で「一度もしなかった」者を0、それ以外の者を1とした。同様に、「学校案内参照ダミー」とは、「進学のために学校案内を見たり取り寄せたりした」という項目について「一度もしなかった」者を0、それ以外の者を1とした⁽⁷⁾。

「友人との進路談話頻度」とは、特に親しくしている友人と「高卒後の進学について」および「高卒後の就職について」どれほど頻繁に話し合ったかを点数化した指標である。

表10 使用変数一覧

従属変数	
模索ダミー	専各志望 模索=1、一貫=0
独立変数	
性別ダミー	男子=1、女子=0
学科ダミー	基準:商業科
普通科ダミー	普通科=1、その他=0
工業科ダミー	工業科=1、その他=0
総合学科ダミー	総合学科=1、その他=0
成績	下1～上5の5段階
進路活動指標	
先生への相談ダミー	進路を先生に相談=1、否=0
学校案内参照ダミー	学校案内を見た=1、否=0
友人との進路談話頻度	高卒後の進学・就職について友人と話し合った頻度
高校コミット指標	
授業興味ダミー	授業面白い=1、否=0
学校逸脱行動	遅刻、サボリ、欠席、校則違反の合計ポイント
勉強時間(家・塾計)	高3春の週平均(単位≠時間)
勤労観ダミー	
就職先延ばしダミー	進学動機の一つが「まだ就職したくなかったから」=1、否=0
仕事不明ダミー	「どんな仕事をしたいのかよくわからない」=1、否=0
現在志向ダミー	「将来よりも今の生活を楽しまたい」=1、否=0

高校へのコミットに関する指標としては、2変数を使用した。まず、「授業内容は面白い」とした者を1とし、「授業興味ダミー」とした。「学校逸脱行動」とは、高3の4～7月に「学校に遅刻した」、「授業をさぼった」、「学校を休んだ」、「校則をやぶったため、注意された」とする回数を、合わせて点数化したものである。

「勉強時間」とは、高3の4～7月に1週間あたり平均して勉強した時間を、家庭および塾・予備校で合計して点数化したものである。勤労観に関する指標としては、3変数を使用した。「就職先延ばしダミー」とは、自分の進学先について「まだ就職したくなかったから」という質問で、あてはまるとした者を1とするダミー変数である。「仕事不明ダミー」とは、「どんな仕事をしたいのかよくわからない」という質問で、あてはまるとした者を1とするダミー変数である。「現在志向ダミー」とは、「将来よりも今の生活を楽しまたいと思う」という質問で、あてはまるとした者を1とするダミー変数である。これらは1であれば、勤労観に乏しいと考えられる。なお、各変数の単独での影響を見るために、相関に留意しつつ、あえて交互作用項は入れなかった⁽⁶⁾。

これら使用した変数の基本統計量は、表11の通りである。

表 1 1 使用変数の基本統計量

	平均値(S.D.)
N	1119
模索ダミー	0.7846(0.4113)
性別ダミー	0.3914(0.4883)
学科ダミー	
普通科ダミー	0.6926(0.4616)
工業科ダミー	0.1072(0.3096)
総合学科ダミー	0.0804(0.2721)
成績	2.7864(1.1767)
進路活動指標	
先生への相談ダミー	0.8445(0.3625)
学校案内参照ダミー	0.9777(0.1479)
友人との進路談話頻度	6.1135(2.5159)
高校コミット指標	
授業興味ダミー	0.2547(0.4359)
学校逸脱行動	5.4155(8.6588)
勉強時間(家・塾計)	1.7596(3.3194)
勤労観ダミー	
就職先延ばしダミー	0.3271(0.4694)
仕事不明ダミー	0.2127(0.4094)
現在志向ダミー	0.6095(0.4881)

これらの変数を使用して得た分析結果は、表 12 の通りになった。

表 1 2 専各進学先決定者についての二項ロジット

	B	Exp(B)
性別ダミー	0.3241*	1.3828
学科ダミー		
普通科ダミー	0.3043	1.3557
工業科ダミー	0.2176	1.2430
総合学科ダミー	0.3317	1.3933
成績	-0.061	0.9408
進路活動指標		
先生への相談ダミー	0.3118	1.3659
学校案内参照ダミー	0.0188	1.0189
友人との進路談話頻度	-0.0477	0.9535
高校コミット指標		
授業興味ダミー	0.4330**	1.5419
学校逸脱行動	-0.0164*	0.9837
勉強時間(家・塾計)	0.0557*	1.0573
勤労観ダミー		
就職先延ばしダミー	0.1054	1.1112
仕事不明ダミー	0.8045***	2.2355
現在志向ダミー	0.3284**	1.3887
定数	0.6408	1.8981
-2 Log likelihood		1117.490
Chi-Square		48.478***
df		14
N		1119

* $p < .100$ ** $p < .050$ *** $p < .010$

まず、性別に関して述べると、男子は女子に比べて約 1.4 倍、模索を経ての専各進学となりやすい。この原因については、また別の分析が必要になる。

次に、高校へのコミット度合いを示す指標 2 つについて見てみよう。

高校の授業が面白いと思っていた者は、そうでない者に比べて約 1.5 倍、模索を経ての専各進学決定となりやすい。逆に言えば、授業が面白いと思っていなかった者は、一貫型に多い。これは、授業が面白いと思っていた者が進学など他の進路との間で迷っていた可能性と、進学トラックというより就職トラックに近い進路である専各に進むことを決定した者にとり、高校の授業がアピールする内容ではない可能性を示唆している。また、学校逸脱行動、つまり、遅刻・さぼり・欠席・校則違反など、就職時に不利になると考えられている指標についてはあまり影響力がなく、一貫型と模索型とで大きな違いをうまない。ここからは、就職が困難そうだという見通しが専各志望に影響を及ぼすことが少ないこと、言い換えれば、就職断念型の結果としての専各志望が少ないということが推察される。

さらに勤労観に関する指標のうち、有意であった 2 つを見てみよう。

自分のしたい仕事不明な者はそうでない者に比べて約 2.2 倍、将来よりも今を楽しみたいと考えている者はそうでない者に比べて約 1.4 倍、模索を経ての専各進学になりやすいという結果になっている。これは非常に問題だと言える。専各はほとんどの場合、入学段階で職業ごとに分化した学科に所属し、職業的に専門特化した——裏を返せば、職業的選択肢を限定する——教育を受ける機関となっている。それにもかかわらず、自分のしたい仕事不明なままに、専各という進路を選びとっていることになる。したい仕事不明な者が、そうでない者に比べて模索型の志望を抱きやすいことは論理的に妥当だが、模索の結果として、したい仕事がお不明なままに専各に進学していることは問題だと言える。将来のことよりも現在の楽しみを重視する者が約 1.4 倍模索型になりやすいことを合わせて考えれば、進路決定の先延ばしのために専各進学を選び取った可能性が高いと言える。進路決定の先延ばしとしても、それがなぜ大学ではなく専各への進学なのかについては、経済的な事情が一因かと推察されるが(藤田 1982, p.5)、本調査には家庭の経済状況に関する質問項目がないため、これ以上の検討はできない。

これに対し、学科の違い、成績、先生に進路一般の相談をしたか、学校案内を見たり取り寄せたりしたか、友人と進路(就職・進学)についてどれぐらいの頻度で話し合っていたか、まだ就職したくないという理由で進路を選んだかどうかなどは、専各進学選択過程に、単独では直接的影響は及ぼさない。

まとめると、学科、成績、逸脱行動、進路活動などは一貫型と模索型の違いにはつながらない。男子/授業に興味がある/勤労観に乏しい場合ほど、専各進学決定が模索型になりやすい。逆に言えば、女子/授業に興味がない/勤労観に問題がない場合ほど一貫型になりやすい。特に、勤労観が備わっているかどうかが一貫型と模索型の違いに大きな影響を及ぼす。仮に進路選択過程が模索型でも、その結果に本人が満足していれば問題はないであろう。しかし実際に、模索型では進路決定後もなお自分の進路について悩んでいる者が多くなりやすいことを考慮すれば(表は略。オッズ比:男子 2.2、女子 1.7)、やはり勤労観の育成が課題になると言えよう。

4. 一貫型／模索型の職業生活展望

上では、専各進学決定者を志望の一貫性に注目して一貫型と模索型に分け、それぞれに影響を及ぼす要因を検討し、特に勤労観が大きな影響を及ぼすことを確認した。ここでは、そのような志望選択過程の違いにより、職業生活に関する展望が異なってくるかどうかを検討する。具体的には、一貫型か模索型かどうかにより、(1)フリーターに対する認識、(2)将来の働き方についての希望が異なるかどうかを見ていく。

4.1 フリーター観の比較

1章で述べたように、学歴別に見た場合、専各卒業者はフリーター輩出母体の一つでもある。また、3章で見たように、進路選択過程が一貫型か模索型かによって勤労観が異なる。こうしたことから、一貫型であるか模索型であるかによってフリーターへの認識が異なり、特に模索型は、フリーターに対してより親和的・共感的な認識を示すのではないかという仮説が立てられる。フリーターへの共感が大きいほど、潜在的なフリーター予備軍とまではいかないにせよ、不安定就労によりつながりやすいと考えられる。

この仮説を検証するため、まず、フリーターについて意見をたずねた質問項目群を因子分析し、フリーターへの認識を類型化する。続いて、一貫型／模索型によってその認識が異なるかどうかを見る。

フリーター観に関わる9つの質問項目を因子分析にかけた結果は、表13の通りである。

表13 フリーター観に関する質問項目の因子分析

	因子負荷量		
	第一因子	第二因子	第三因子
働き口が減っているのでしかたない	<u>0.8057</u>	0.0312	-0.185
自分がやりたいことを探すためにはよいことだ	<u>0.6139</u>	-0.0628	0.2838
そのうちにきちんとした仕事につく人が多いのでたいした問題ではない	<u>0.4887</u>	-0.1841	0.2905
本人が無気力なせいだ	-0.3197	<u>0.6106</u>	-0.0494
高校の進路指導が不十分なせいだ	0.189	<u>0.6736</u>	0.2366
フリーターになると、あとあとまで不利だ	-0.097	<u>0.6232</u>	-0.2229
夢を実現するためにフリーターをしている人はカッコいい	0.0264	-0.1262	<u>0.7354</u>
だれでもフリーターになるかもしれない	0.0569	0.1945	<u>0.5318</u>
フリーターもりっぱな1つの働き方だ	0.2606	-0.353	<u>0.5395</u>
累積因子寄与率(%)	16.490	32.402	48.202

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

ここで抽出された3つの因子は、それぞれ、第一因子は「フリーター楽観」、第二因子は「フリーター問題視」、第三因子は「フリーター共感」と名づけることができるだろう。

次に、各因子の該当する質問項目を合計し、得点化して、新たに「フリーター楽観度」、「フリーター問題視度」、「フリーター共感度」という3つの尺度を作成した。

この3尺度につき、一貫型／模索型それぞれの集団ごとにヒストグラムを描いたところ、正規分布であることを確認した。そこで、各尺度につき、独立した2標本のt検定を実行した。その結果、いずれにおいても有意ではなく（フリーター楽観度； $t=-.602$ 、 $p=.548$ 、フリーター問題視度； $t=.193$ 、 $p=.847$ 、フリーター共感度； $t=.301$ 、 $p=.764$ ）、なおかついずれの尺度・群においても、平均値は7.8前後と揃っていた。つまり、フリーターの問題性を認識している者も楽観的評価の者も同程度存在し、一貫型／模索型による差異もない。

この理由は不分明である。この数年、フリーターが社会問題化していることが、生徒の認識に影響を与えているのかもしれない。あるいは、専各進学者においては、高卒後直ちに就職する者に比べて「就職」が眼前に迫っていないととらえられている——実際には、専各でも1年目に就職ガイダンスほか就職関連のスケジュールやイベントが始動するのだが——ために、働くということが実感を伴って想像されないのかもしれない。

さて、現段階では、一貫型と模索型でフリーターに対する認識の違いはなく、模索型であるからフリーターに親和的だとは言えないことが分かった。専各は学歴別に見たフリーター層の輩出母体の一つであるが、少なくとも進路選択過程が一貫型か模索型かは、フリーターに対する認識の面に影響を及ぼさない。この認識が今後変化していくのかどうか、実際に一貫型と模索型とで、フリーターや不安定就労者になる蓋然性が異なるのかどうか、フリーターに共感的といった性向や勤労観とは別の外在的要因から不安定就労に流れていくのかどうかといったことは、今後の追跡調査を待って検討したい。

4.2 将来のキャリア設計の比較

同じ専各進学決定者の中でも一貫型と模索型とでは、どのような働き方をしたいかという将来の展望が異なるだろうか。30歳ごろにどのような働き方をしたいかという質問項目について、四大進学先決定者および正社員内定者と比較しながら見てみた(表14~16)。

表14 30歳時のキャリア設計(四大進学先決定者)

	正社員希望	独立希望	計
一貫	591(79.0%)	157(21.0%)	748(100.0%)
模索	400(75.0%)	133(25.0%)	533(100.0%)
計	991(77.4%)	290(22.6%)	1281(100.0%)

$df=1, p=.095$

表15 30歳時のキャリア設計(正社員内定者)

	正社員希望	独立希望	計
一貫	359(83.3%)	72(16.7%)	431(100.0%)
模索	513(79.5%)	132(20.5%)	645(100.0%)
計	872(81.0%)	204(19.0%)	1076(100.0%)

$df=1, p=.123$

表16 30歳時のキャリア設計(専各進学先決定者)

	正社員希望	独立希望	計
一貫	127(58.0%)	92(42.0%)	219(100.0%)
模索	534(67.3%)	259(32.7%)	793(100.0%)
計	661(65.3%)	351(34.7%)	1012(100.0%)

$df=1, p=.010$

「正社員希望」とは、30歳ごろに「正社員として働きたい」と回答した者、「独立希望」とは、「自分で事業を起こしたい」または「独立して一人で仕事をしたい」と回答した者である⁽⁹⁾。

四大進学先決定者では、志望の選択過程が一貫型でも模索型でも、正社員として働くことを希望する者が7～8割と、独立型を上回っているが、一貫型の方が正社員を希望する者の割合が約1.3倍多くなる。

正社員内定者では、志望の選択過程が一貫型か模索型かによって、キャリア設計は変化しない。8割前後が正社員として働くことを希望している。

これに対し専各進学決定者では、四大進学先決定者や正社員内定者に比べて「独立希望」者の割合が高く、また、同じ専各進学決定者内でも一貫型か模索型かによって、キャリア設計が異なる。一貫型は模索型の約1.5倍、「独立希望」者が多い。一貫型は専各進学者の中でもいわゆる「手に職」的な志向が強く、独立起業や自営などを希望し、企業に頼らない働き方を志していると言えよう。

5. まとめと課題

本稿では、中等後（高等）教育機関でもあり職業教育機関でもあるという専各の特徴から、専各進学者内の差異に注目した。またこの際、高校生の進路選択とキャリア設計という観点から、高校在学中の進路選択のプロセスも念頭におく必要性を指摘した。そのため、進路選択の類型を一貫型・模索型に大別し、高校在学時の変数を分析に使用した。一連の分析は、専各進学者の中でも模索型が、相対的に不安定就労につながりやすい層なのではないか、という背後仮説のもとに行った。

1・2章では、専各という進路について先行研究を概観し、また、志望が一貫型か模索型かを軸に、本調査対象における専各進学者の特徴を見た。

3章では、進路選択のパターンが一貫型か模索型かを分かつ要因を調べるため、一貫型・模索型を従属変数にし、個人の属性や在学時の行動などの独立変数を投入してロジスティック回帰分析を行った。その結果、男子、授業に興味がある、自分のしたい仕事不明、現在志向といった場合に、模索型の過程を経ての専各進学になりやすいことがわかった。学科、成績、勉強時間、進路活動など、伝統的に進路選択において効くとされてきた変数は、一貫型か模索型かというタイプとは関係がまったくない、またはほとんどなかった。

4章では、一貫型・模索型を独立変数とし、進路選択のタイプの違いによって職業生活などに対する展望が変わるかを調べた。その結果、現時点では、不安定就労に対する意識について専各進学決定者内での志望の選択過程による差はないこと、また、一貫型において独立希望が高いこと、模索型において正社員希望が多いことがわかった。

3・4章の結果をまとめると、表17のようになる。

表 17 専各進学決定者内での差異

志望選択過程	特徴	フリーター認識	将来の働き方
一貫型	女子、授業に興味なし、したい仕事不明でない、非現在志向	差なし	独立希望
模索型	男子、授業に興味あり、したい仕事不明、現在志向		正社員希望

3・4章から、勤労観が乏しいままに専各に進学する層としての模索型の特長が明らかになった。とりわけ、「したい仕事が見つからない」という状況でありながら、専各という職業に直結した教育を行う機関に進学していることは、重大な問題だと言えよう。しかもこの模索型は、30歳ごろの働き方として独立や自営ではなく正社員を希望している。専各出身がフリーター輩出層の一つになっていることは再三述べているが、専各進学者の中でも、おそらくこの模索型が、将来的には不安定就労に流れて行く可能性が高いと推察される。実際にこの仮説が正しいのかどうかは、以降の追跡調査における検討課題となる。

本稿では、同じ専各に進学する層の内部に違いがあることを見てきたが、依然限定的な枠組みでしかなく、課題は多い。以下、二点に絞って述べる。

第一に、他の進路との比較、他の進路における進路決定パターンの差異との比較が十分ではない。確かに本稿では、フリーター輩出母体の一つである専各進学層の中でも相対的に不安定就労に流れやすいと思われる層については指摘したが、四大進学や就職など、他の層（およびその内部）との比較は十分にしていなかったため、専各進学者の模索型であるから不安定就労に開かれているのか、それとも、模索型であることが不安定就労につながりやすいのかは明らかではない。

第二に、本稿では模索型すべてを批判し、一貫型を推奨しているわけではない。通常、進路を選ぶ際には、迷うことの方が多いと思われる。迷い模索した結果に納得のいく進路が見つければよいのであって、特に一貫型であることにこだわる必要はない。とはいえ、本調査における専各進学決定者は比較的志望が一貫しているという点⁽¹⁰⁾を差し引いても、模索型の中に、模索の過程が適職探索のために機能していない層がいることも事実である。

したがって、模索型の内部における差異を検討することが、次の課題となる。この際、これまでは経験的に分類されてきた、進学断念型・就職断念型などの類型を使用することも一例として考えられる。

なお、限られた変数の投入であったとはいえ、進路活動関連の指標が有意ではなかったことについて、若干付記しておきたい。一貫型とは高1のときから専各を志望していた者であるから、高校の進路指導が有効であったか否かというよりも、当初から、学校などにあまり頼ることなく希望する職業や進路が明確であったと考えられ、それが確かに適切な進路選択につながっているのか、若干懸念される。また、進路活動や進路指導が効果的だったかどうかということは、模索型の者について見ることで評価ができることであろう。たとえば、模索型の中でも、進路指導の結果、進路に対する満足度が高まった層もいるかもしれない。進路指導の効果についても、模索型内部の差異と合わせて、課題としたい。

本稿では主に専各進学者のネガティブな側面について言及してきたが、こんにち、特に中小企業において専各出身者は即戦力として活用されているし、模索とはそもそも適切な進路を選ぶためにある。進路選択過程が迷いの多いものであったとしても、適切な活動や指導など、本人の努力と周囲のサポートによって、納得や満足のある道を選ぶことができるはずである。この点を強調して結びとしたい。

【注】

[1] 厳密には、専修学校のうち専門課程をおくものみを専門学校と呼ぶ。しかし、質問紙の調査項目および慣習に従い、ここでは専修学校内の違い、専修学校と各種学校の違いを区別せず「専門・各種学校」として用いることとする。専門課程へ入ることを進学、一般課程へ入ることを入学と言うが、これも以下では区別しない。また、各種学校には通常では予備校を含む可能性もある。しかし、ここでは1月時点で専門・各種学校に進学先が決定している者を対象にしているため、各種学校＝予備校である可能性は低いと考えてよい。

[2] 平成6年6月一定要件を満たす専門課程の修了者に「専門士」の称号を付与できる制度の設立、平成9年12月大学審議会、平成11年6月生涯学習審議会、平成17年1月中央教育審議会などを経て、こんにちでは行政的にも、専各は多様化する高等教育の一翼を担う存在だと位置づけられるようになった。

[3] 四大決定者がかなり少なく見えるのは、1月という調査時点の問題によるところが大きいと考えられる。つまり、この時点での決定者は、ほとんどが私大合格者あるいは推薦入試など特別入試合格者だと考えられる。本サンプルでは、四大進学先未定者(1,590人)も決定者(1,593人)とほぼ同数であり、この中の相当数が実際に四大進学するものと思われ、学校基本調査との差は縮まる。

[4] その他の選択パターンを上位10パターンまで述べると(以下、表記は高1—高2—高3の4~5月ごろ—高3の7~8月ごろ—高3の1月の順)、③「迷い—専各—専各—専各—専各」が57人(4.3%)、④「大学—専各—専各—専各—専各」が54人(4.1%)、⑤「考えていなかった—専各—専各—専各—専各」が49人(3.7%)、⑥「大学(四大)—大学—大学—大学—専各」が41人(3.1%)、⑦「就職—就職—就職—専各—専各」が40人(3.0%)、⑧「考えていなかった—迷い—専各—専各—専各」が38人(2.9%)、⑨「大学—大学—大学—専各—専各」が37人(2.8%)、⑩「就職—専各—専各—専各—専各」が35人(2.7%)となっている。大学志望と専各の間で揺れる者が多いことが注目される。

なお、高1の当初に専各を志望していた者1,004人は、その後190通りの進路選択パターンをたどる。単純に帰着点についてだけ見ると、そのパターンの上位5位は、①「専各→専各」が365人(36.4%)、②「専各→就職」が211人(21.0%)、③「専各→大学」が104人(10.4%)、④「専各→短大」が73人(7.3%)、⑤「専各→就職未定」が70人(7.0%)となっている。

[5] この場合の四大進学先決定者のほとんどは、私大合格者あるいは推薦入試などの特別入試合格者であるという点で、限定的な母集団である。上記注3参照。

[6] ここでは勤労観の指標の中に、「就職先延ばしダミー」として、進学動機の一つが「まだ就職したくなかったから」という項目を利用している。先行研究と同様、入学動機として「資格や技術が身につくから」などについての項目を、独立変数として投入できるのではないかと考えられるだろうが、本調査での質問の表現が微妙であり(質問紙の間9の項目群)、因果関係も曖昧になると考えて外した。

間9の冒頭で「進学先についておたずねします」という表現のあと、「資格・技術が身につく」、「まだ就職したくなかったから」、「就職試験に失敗したから」、「とくに深く考えなかった」など、必ずしも語尾に「から」がつくなど、進学理由や動機だとわかる表現で評価を聞く表現ではないものが混在しているためである(たとえば、専各が技術を身につける機関だというこ

とは、進路に限らずほとんどの者が考えることであり、技術が身につく機関だと評価しているからと言って、必ずしも進学を決意する理由にはならない。

ここまで厳密にワーディングにこだわる必要はなく、仮の指標として投入すべきだという考えも、当然ながらあると考え、いくつか投入したが、有意にはならない、モデルの適合度が落ちるなどの問題があった。おそらくは、こうした項目は模索型内部での差異を見る際にいきる指標であり、今後の課題となる。「まだ就職したくなかったから」という項目は、入学動機としてだけではなく、進路決定の遅延など勤労観に関わる項目ととらえられることから、ここでは採用している。

[7] これは、完全な無回答（「一度もしなかった」以外の項目もすべて未記入）の者を「活動あり」とみなしてしまう可能性があるが、ごく少数なので無視した。たとえば、「進路一般について進路指導の先生や担任の先生に相談した」という項目で完全な無回答は18人であった。

[8] たとえば、性別ダミー（男子ダミー）×工業科の交互作用項を入れた場合でも、有意になる変数に変化はなく、Hosmer&Lemeshowの検定結果からもモデルの説明力が落ちたため、分析に加ええないことは妥当とみなした。

[9] なお、30歳時の働き方の希望を問う選択肢には、他にも「親の家業をつぎたい」、「アルバイトやパートで働きたい」、「専業主婦・主夫になりたい」などがあったが、専各進学者においては「正社員として働きたい」が過半数、「自分で事業を起こしたい」および「独立して一人で仕事をしたい」が3割弱であったため、この3つの選択肢に限定した。

[10] 本稿では、進路志望を高1・高2・高3の4～5月ごろ・高3の7～8月ごろ・高3の1月と比較的細かく聞いている上に、一貫型は、“これらすべての時期に専各と回答した者”という厳しい条件にあてはまる者に限っている。しかし、進路変更を無計画に繰り返したと見られる層は多くはなく、“一貫”の条件をゆるやかにすれば、かなりの層が「堅実」な層であると思われる。

【参考文献】

- 藤田英典 1982「教育と職業の機能的関連 ——専修学校の意義と限界」『雇用と職業』39号、雇用促進事業団雇用総合研究所、pp.1-5.
- 倉内史郎 2000「専門学校 ——新時代の職業教育への予兆をみる——」日本産業教育学会編『産業教育学研究』第30巻第2号、日本産業教育学会、pp.27-34.
- 小杉礼子・堀有喜衣 2002「第1章 若者の労働市場の変化とフリーター」小杉礼子編著『自由の代償／フリーター ——現代若者の就業意識と行動——』日本労働研究機構、pp.15-35.
- 雇用促進事業団雇用職業総合研究所 1983『専修学校卒業生の就業実態に関する調査研究報告書（中間報告）』職研調査研究報告書 No.27、雇用促進事業団雇用職業総合研究所
- 雇用促進事業団雇用職業総合研究所 1985『専修学校卒業生の職業と意識 ——専修学校卒業生調査から——』職研調査研究報告書 No.41、雇用促進事業団雇用職業総合研究所
- 雇用促進事業団雇用職業総合研究所 1986『企業における専門学校卒業生 ——専門学校卒業生の採用と配置に関する調査より——』職研調査研究報告書 No.58、雇用促進事業団雇用職業総合研究所
- 松下守邦 1991「専修学校専門課程の進学者増加について」『社会学論叢』No.111、日本大学社会学会、pp.41-57.

耳塚寛明 2000「第4章 進路選択の構造と変容」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、pp.65-82.

文部科学省『学校基本調査報告』

東京都立労働研究所 1989『専修学校（専門学校）卒業生の労働市場 ——資格・専門職業労働市場の実態——』労働市場調査研究 No.10、東京都立労働研究所

東京都労働経済局総務部企画室 1994『東京の労働'94』東京都労働経済局総務部企画室

山本一彦 1993「専門学校教育の今日的意義と課題 ——短期高等教育機関としての専門学校の位置づけをめぐって——」『社会学論叢』No.117、日本大学社会学会、pp.91-107.

山野晴雄 1993「専門学校への進路指導」『進路指導』第66巻第9号、日本進路指導協会、pp.21-26.

高校生の大学進学希望のマルチレベル分析 学校タイプの影響に着目して

朴澤泰男

(ミシガン大学大学院)

本章では、高校3年生が、卒業時に4年制大学への進学を希望するか否かという選択に、学校タイプが及ぼす効果を分析した。階層（一般化）線形モデルを用いて、高校生調査、高校調査の両方から得られたデータを分析した結果、次のことが明らかになった。第一に、卒業時の進学希望率は学校や学校タイプによって異なる。第二に、女子よりも男子の方が、高校1年生当時に進学を希望していた生徒の方が、また、学校外学習時間が多いほど、高校の成績がよいほど、卒業時に大学進学を希望する。第三に、生徒が所属する学校のタイプや学校外学習時間の学校平均も、本人の進学希望に影響を与える。普通科で進学率の高い学校ほど、学校平均の学習時間が長いほど、進学を希望する見込みが高い。

1. はじめに

高等教育への進学が、ある個人の社会経済的地位の達成にきわめて重要な意味を持つことは、あらためて言うまでもない。そうした進学の手がかりが人々の間に開かれているのか、開かれていないとすればなぜなのか、という問題には多くの社会的・政策的な関心が寄せられてきた。高校生の進路選択や、それに家庭背景や学校が及ぼす影響に関する研究も、このような幅広い関心を反映したものと言える。

高校教育のハイアラーキカルな編制に着目した日本のトラッキング研究も、そうした系譜を引く重要な研究分野の一つであり続けてきた。特に、どのようなタイプの高校に進学するかによって、卒業後の進路選択の機会集合が異なるという事実は多くの研究者の関心を集め、様々な方法によって学校タイプ/ランクの影響が検証されてきた（樋田ほか 2000、尾嶋 2001、Ono 2001）。

そうした研究の代表的な手法は、生徒を分析単位として、進学希望やアスピレーションを家庭背景など個人の要因や、学校タイプ/ランクに回帰させるというものである。しかし、集団・組織レベルで観察される要因を、個々の生徒に対するインプットとして扱うことは、観察の独立性の仮定を満たさないばかりか、学校の効果を過小に評価することにつながる。これはアメリカの学校効果研究の文脈で、しばしば指摘されてきた問題である（Bidwell & Kasarda, 1980）。

そこで本章では、マルチレベル分析の手法を用いて、高校生の大学進学希望に生徒個人の要因と学校タイプの要因とが及ぼす影響を分析する。所属する集団・組織が個人の選択に与える影響のみならず、個人のコントロールの及ぶ要因の効果が、所属集団・組織によってどのように異なるのか、ということが焦点となる。

2. 分析課題

以上の問題意識を踏まえて、本研究では次の5つの仮説を設定して分析を行う（括弧内の記号は、図1に示した分析枠組みと対応している）。

仮説1 高校3年生の卒業時の大学進学希望は、学校によって異なる（A）

仮説2 生徒の性別や高校1年生当時の進学希望、学校外学習時間、高校の成績が、卒業時の進学希望に影響を及ぼす（B）

仮説3 生徒の学校外学習時間と卒業時進学希望との間の関係は、学校によって異なる（A）

仮説4 生徒が所属する学校のタイプや、学校外学習時間の学校平均は、本人の卒業時進学希望に影響を及ぼす（C）

仮説5 生徒個人の学校外学習時間が卒業時進学希望に及ぼす効果は、所属する学校のタイプや、平均的な学習時間レベルに依存する（D）

本章の主要な関心は、高校3年生が卒業時に4年制大学への進学を希望するか否かという選択に、学校タイプ（普通科か専門学科か、また、普通科の中でも進学校かどうか）が及ぼす効果にある。しかし、学校タイプだけが高校生の進路をすべて決定するわけではないし、ある学校タイプ/ランク（さらに言えば、ある特定の学校）に所属することが進学希望に及ぼす効果は、すべての生徒にとって同じであるとは限らない。したがって、学校タイプが卒業時進学希望に与える影響を分析するにあたっては、生徒個人の要因をも同時に考慮する必要がある。

そこで、まず個々の生徒が卒業時に大学進学を希望する見込みそのものについて、学校間に差異があるのかどうかを検討する（仮説1）。次に、学校タイプの効果を検証するのに先立って、各学校内において生徒の性別や高校1年生当時の進学希望、学校外学習時間、成績が、卒業時進学希望に影響を与えていることを確認する（仮説2）。学習時間は、生徒の（進学に向けた）努力の現われと捉えることができるが（荻谷 2000）、この要因と、卒業時進学希望との間の関連に、学校による違いが見られるどうかをも分析する（仮説3）。

これらのことを踏まえた上で、生徒が所属する学校のタイプが、本人の卒業時進学希望に与える効果を検証する。その際、生徒が所属する学校のプロフィールのうち、学校タイプ以外の要因（ここでは、各学校における生徒の学校外学習時間の平均値）をも統制することで、ネットの効果を取り出したい（仮説4）。なお、生徒個人の学校外学習時間が卒業時進学希望に及ぼす効果は、どのようなプロフィールをもつ学校に所属しているかによって異なる可能性がある。そこで、学校外学習時間の平均的なレベルを統制しつつ、学校タイプが、個々の生徒の学習時間と進学希望との間の関係に及ぼす影響をも分析する（仮説5）。